

ザ・ミューディアム：メディア論の試み(8)第五の章 メディア空間(4)

NAKANO, Osamu / ナカノ, オサム / 中野, 収

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)

48

(号 / Number)

3-4

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2002-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015208>

- (2) 月面着陸の瞬間の視聴者は全世界で数億を越えたといわれる。今回のテロ事件の映像の視聴者数も同様で、かつ視聴者たちは一瞬ではあれよく似た感想をいだいたはずである。
- (3) ノルベルト・ボルツ『グーテンベルク銀河系の終焉』識名・足立訳(1999、法政大学出版局)参照。
- (4) 一時、少女・女子高生・女子大がカメラを持ち歩くという流行現象があった。彼女らは「消えてゆく一瞬々々を記録したいのだ」といった。
- (5) Castells, M "The Internet Galaxy" Oxford 2001

の事項が表示される。「密度が高い」と書いたのは、そこに表示された事項の、少なくとも一見したところのその多様と多量があるからである。そしてさらにその中の特定事項をクリックすれば、また新しい情報(場合によってはデータであり、知識)が同じように多量かつ多様に羅列され、各事項には親切な説明が付されている。これらを読んだ後、さらにある事項をクリックすれば……、と際限がないのである。こうした情報の出し入れを無限に繰り返している、当の彼(女)らはどんな感覚をもつのだろうか。ここから先の考察は稿を改めて、まとめてみようと思っているので本稿では割愛することとしたい。

すでに指摘してきたようにインターネットをめぐることは、さまざまな問題が提示されている。その経済(学)的側面や財政的面的に関しても、インターネットの中心部分がアメリカにあるらしいこと、アメリカがそのことから膨大な富を得ていること等をめぐって手厳しい指摘もなされている。さらにその対極(といえるかどうか)では、インターネットのつくる共同社会、インターネットにおける社会性、インターネットが促す特殊な人と人とのかわりについても、各種調査研究が特にアメリカを中心に数多く提出されている。しかも興味深いのは、酷似した調査の結果が必ずしも一致していないのである。おそらくインターネットのつくるメディア空間は、まだ、安定的に機能していないからであろう。⁽⁵⁾ここで参照している書籍の名称は、そのものずばりといえればいいか、『インターネットの銀河系』である。著者は、おそらくインターネットが、今日、グーテンベルクを超えた規模のコミュニケーションネットワークを形成しているとみているのだろう。しかし、内容的には、「銀河系」であることにネガティブな意見や調査結果も紹介している。やはり著者もインターネットの完成という観念には至っていないのではなからうか。

にもかかわらず、インターネット、ハイパーメディアの可能性を、グーテンベルクのそれを超えるものとして語っている。したがって、次稿の多くの課題は、完成していないインターネット、ハイパーメディア、電子メディアの銀河系についての、完成の域になっていないこれらについての、可能性と現実性をさぐることになるだろう。

注

(1) マルクスが、これとよく似た表現で意識について書いている。『ドイツ・イデオロギー』の中で。

度は高いし、いわゆるマルチメディアリテラシーが高い、と評価されている。つまり、このシステムの情報通であり、このシステムに關してのオピニオンリーダーが彼(女)らなのである。もちろん、通常のシステム利用は自由自在であって、その上で、裏の事情にもくわしく、どう愉しむかを、よく知っているわけである。

おそらく、この段階にまでリテラシーが達すると、システム利用の愉しさが本格化するのだろう。したがって、現実には、システムをごく親しんでいるのと、メールの交換程度以上のことはしないのと、利用の態様はこの二極に分解しているのであろう。もちろん旧世代と違い、パソコンに対するアレルギー反応はない。マシンもしくはガジェットとみなしている。なにしろ、ケイタイをあれだけ常用している世代である。パソコンはその延長上に位置づけられる。現に彼(女)らは位置づけているようである。したがって、パソコンに魅力を感じ、それこそ「ハマッテ」しまうか、ガジェットとして適度に利用するかは、個人的な性格・事情にかかっているようである。もちろん、二極分解といっても、キレイに二つのグループに分けられるというのではなく、「ハマッテ」はいないけれど、パソコンとのつきあいにかんがりの時間をあてている場合もあるらしいから、正確には相対的な問題なのだろう。

こうして、彼(女)らは、パソコンの設定するメディア空間に入る。いや、パソコンを使って、彼(女)らなりのメディア空間を形成する。小さなパソコンの画面が、いつか自分を包み込むパノラミックな世界に変容してゆく。パソコンに、つまりはメディアに包まれるのである。この時、彼(女)らは、本稿でしばしば指摘したメディア空間、ヴァーチャルで、異様で、旧世代には理解しがたい異空間の住人になったことを実感するはずである。そこには、いわゆる他者は存在しない。現にあるのは、移ろいゆく画面だけである。しかし、その画面の向う側にとすべきか、画面そのものにとすべきか、彼(女)は他者性を直観している。「もう、オレ(アタシ)だけではないんだ」と。つまり、これは、ある完全に設定された、人間的なメディア空間なのである。したがって、画面とのコミュニケーションは他者とのそれと実感(錯覚)されている。情報密度も、コミュニケーション密度も、大変に高い空間なのだ。それは、日常会話という場面よりも、より密度が高いとさえ直観されている。したがって、情報・コミュニケーションとみずからの一体感は、この空間において最高度に達することになっているのかもしれない。

実際、インターネットを少しでもやったことのある人なら常識にすぎないのだが、ある事項をクリックすると、それに関連した数多く

このメディア空間内で何が起っているのかをすべてチェックするのは、理論的にも現実的にも不可能である。全体社会がそうであるように、ここでも何ごとかが起らないと、調査は行われえないし、司直の手が何事かの真相を知るために行動を起こすわけにはいかない。したがって、「捜査」は常に事後的である。このシステムを利用した犯罪は、一たん起こってしまったら、何事かを目的にして「犯罪的」行為を犯した人物の目標は、すでにして達成されてしまっている。インターネットを使った薬物の取引、企業の秘匿すべきデータの盗み出し、プライバシーを著しく侵害したデータの流通など、すべて事態が発生した瞬間に、すべてが「後の祭り」、手のほどこしようがなかった。これからも、新種のこうした悪用が続出すると予測しておいたほうがいい。それを如何に阻止するか、理論的・技術的に可能な処置は行われると思われるけれど、おそらく、完全に事前にチェックすることは不可能と思われる。

これらは、実は、そっくり「近代」に属する問題だとぼくは考えている。自由を基本（的人権）と価値づけた近代社会の場合、なんらかのシステムを作成し、それを利用しつくすことは、基本的に自由とされている。したがって、インターネット上でどんなことがあると、基本的には自由、それを制約する根拠があるとすれば、その行為が他者の基本的諸権利や利益を冒しているという事実がある場合に限られる。従来報告されている「犯罪的悪用」は、いずれも他者の所有する基本的価値を侵害している。けれども起っている。犯罪が発生することをあらかじめ予定している近代社会の原理がここでも生きている。つまり「犯罪的悪用」は起こるのである。結局、近代社会がそうであるように、この種の犯罪を抑制するのは、システムを利用している人々の個人的な倫理感覚に依存するしかない。つまり、近代社会で犯罪を最終的にチェックするのは自己規制でしかないと同じことなのだ。

換言すれば、このシステムは、「犯罪的」に悪用したくなる程度に魅力的なのである。これまで、人類が発明し利用してきたあらゆる表現手段・様式が、多かれ少なかれ、悪用されてきたのは、そういう「力」というか、魅力というか、そういうものを手段・様式、つまりは各メディアが持っていたからである（グーテンベルクの技術や絵画・写真・映画等々の技術・様式が、いかにポルノグラフィの表現に利用されたかを想起してみればいい）。メディアには悪の魅力というものがあるのだ。マルチメディア・インターネット、総じてパソコンシステムだけが例外だとは思えない。現に、このシステムを愉しんでいる若い世代の話を知っていると、反規範的情報、犯罪的情報あるいは裏情報のごとくに妙にくわしいのがある。実際は、若い世代の場合、この種の情報にくわしいのが、システム利用の頻

すが、実に多かったのでないか、と思うからである。

ぼくにとっては、パソコンのつくるネットワークメディア空間は、従来にはない新しさ、奇妙さ、従来の観念やタームでは説明出来ないメディア空間である。再三指摘してきたように、しかし、これまた当然の話なのだろうけれど、みずからのメディア感覚に最も適ったメディアであることは認めているが、これが従来のメディア空間とまったく異質なものだ、という感覚はない。たしかに、既知のメディアとの違い、あるいは既知メディアへの接触とは違った感覚で接していることは事実である。パソコン、インターネット、メールのことを、あれだけ日常会話の話題にするぐらいなのだから。しかし、これが画期的というか、伝統的な感覚や知識ではとらえきれないメディア空間であることを、ほとんど意識していない。おそらく彼（女）らにしてみれば、これはごくありふれたメディア空間のひとつ以外の何ものでもないのだろう。そして、ある世代から上の人々が、深夜ラジオで体験してものとよく似た体験をしているのみならず、かつての世代が経験したことのないハイパーでマルチで全感覚的で、そしてメディアに抱擁されているようなある種の心理的安定感を得ているのであろう。この心的な安定が、ヴァーチャルで、錯覚的で、幻覚的であって、そして必ずしも対面的で、相互作用的な肯定面の少ないという点なども彼（女）らにとっては、問題にならないのだろう。この状況を楽し観視するか、悲観的かつ否定的にみるかは、只今、現在のところは、評者のかなり主観的な未来感に左右される。なんとすれば、まだ、このメディア空間が、社会や文化や人間を支配する第一原因にはなっていないからともいえるし、決定要因としては、いまだに「グーテンベルク銀河系」というメディア空間の「力」が強く作用しているからともいえる。

五 おわりに

この空間が、多くの人々を魅きつけていると推定されるいくつかの理由を想定してみよう。

周知のように、インターネットやパソコンシステムを使った犯罪が、おそらくは通常の間接行為が発生させるのとはほぼ同一の比率で起っている。ある種の悪用をも入れると、いわゆる「悪用」の比率は相対的に高いかもしれない。メールその他を通じたコミュニケーションは、一見、公開されているようにみえて秘匿の意思さえあれば、ある程度、秘密は守れる。完全にネットワーク状になってしまった

身近にあればいい、あるいはメディアが自分を包み込んでいる、そういう実感⇨幻覚が体験できればいいのである。わがオーディオ装置を使って学生所有のCDを再生してみたところ、そのCDには、ヘッドフォンでは聴こえてこないさまざまな音があった。その時、CD所有の学生は大変驚いてはいた。しかし、ぼくの装置による再生をうらやんでいる様子はなく、やはり彼にとっての日常の音楽は、不完全な（ぼくにいわせると）、CDプレイヤーとイアフォンというガジェットによるメディアとの共生こそが唯一の、十分に満足のいく音楽体験なのであった。もちろん、ぼくの眼には、CDプレイヤーとイアフォンのガジェット性と、彼にとってのメディアとしての音楽との間に、何かそぐわないものを感じざるをえなかった。しかし、これは老人の感想にすぎないようである。若者とメディアの関係は、老人のやりたいも感じざるをえなかった。やはり一種奇妙な関係になっているようである。その際に彼（女）らが強調したことは、音楽のみならずで、たとえばゲームにいたるまで、とにかく、みずからの「周囲」がメディアによっておおわれていること、これである。ここに、旧メディアと古い世代の関係と、若い世代のそれとの間には、この程度の対照性のあること知っていていいだろう。

いうまでもないが、彼（女）らの場合、いわゆる「グーテンベルクの銀河系」に属するメディアの場合も、例外ではないのである。電車の中の、かつて書いたお化粧の話もそうなのだが、手にした雑誌にしる、じっとみつめているケイタイにしる、その彼（女）らは、メディアと一体なのである。したがって、その世界にうっかり踏込もうものなら、時には激しく拒絶される。いわゆる「オジン世代」が嫌われるのには、ひとつには、彼（女）らのその世界に干渉したがるからかもしれない。

まあ、そういうメディア感覚をもっている彼（女）らであるから、パソコン・インターネット・メール・チャット等々のメディア行動を可能にしてくれる「相手」は、願ってもない存在なのである。もちろんここで、そういうメディアの出現が、彼（女）らに固有のメディア意識を与えたのか、'60年後半以来の若い世代の古い時代のメディア感覚をことごとく否定していった新しいメディア意識が、旧メディアを含めて、特にパソコンを初めとするパソコン⇨マルチメディアに、ハイパーメディアを発見し、その世界にひたっているということなのか、因果関係は必ずしも明確ではない。ぼくは万物照応という原理をいくらか信じているので、変りつつあるメディア意識の前に、タイミングよくハイパーといわれるニューメディアが、たまたま出現したのでは、と思っている。まあ、予定調和的にそうなったのだ、と考えてもいる。少なくとも、メディアに関して、要求されていたものが、実にタイミングよく出現する、そういうケー

う事情があるからだろう。が、インターネットは、みずからの選択でどのような展開になってゆく、どんな意外な情報に接することになるのか、ほとんど予測などできないからではなからうか。

その意味で魅力的なのである。パソコンネットワークには、時として「ハイパーメディア」という形容語が使われる。少なくとも、インターネットで次々と新しい情報（場面）に接触し、欲しいと思う情報をほぼ自由に入手可能な事態を経験し、メールをやり、チャットをやり、ホームページでの書き込みやりとりをする（映像を伴って）。まさにマルチなのだ。こうした体験の持主の多くが、今少しの改善があれば、これはもう「究極のメディア」だとみなして当然であろう。もちろん、現状では、技術的に改善の余地は十分にある。現に「情報ハイウェイ」は、わが国の場合、極端に少ない。人々の圧倒的多数は、いうならば「一般道路」を利用してネットワークに参加している。問題なのは、たしかに「ハイウェイ」化するに越したことはないけれど、多くの利用者（ユーザーといわねばならないか）から決定的な不満の声が上っていない点にあるように、ぼくには思われる。つまり、情報を送受信するキャパシティには限界はあるにしても、形式構造的には、マルチでハイパーに出来上っている。利用に若干の難点があるにしても、それを決定的な難点とは思えない、今のネットワークで十分に満足している、とそう考えているのではなからうか。人々のコミュニケーション欲求には、とめどないところがあることはたしかだけれど、しかし、あるところまで実現し利用可能になると、とりあえずは満足する、という点もあるのではなからうか。早い話、現状でテレビにもうひとつチャンネルが増えることを強く期待している、という願望を、少なくともぼくは聞いていないし、現にBSにもCSにも「明き」になっているチャンネルがいくつか残っている。人々のコミュニケーション欲求が、ひよっとすると限界にきている証拠かと思うことがある反面、コミュニケーション欲求は、パソコンや新しい情報機器のほうに向いているからとも考えられる。

これは個人的経験であるが、若い世代で、いわゆるオーディオオマニアがもう消滅しているのではないか。音楽は、音質などは第二義的で、CD・MD等で個人的に（ということはヘッドフォンステレオで）愉しむものになってしまった。だから大型装置による原音再生などには、もうこだわらない。もちろん、ヘッドフォン、カセットテープ、CD・MDプレイヤーは必需品である。これらを使うことによって、音に、したがってメディアに包まれていることを期待している。大型装置による原音再生でなく、音楽というメディアが

能力をこえている。前々著に書いたことを、またあらためて書くわけだから、この項では、かつて十分には書き込めなかった、パソコンのつくる大ネットワークの内外でどんなことが起っているのか、その様子を描いてみようと思っている。

もちろん、この空間をメディア空間とみなしての話である。これが、既存の、伝統的(?)などといえる電子メディア空間との相違にふれ、比較を試みながらの記述になるだろう。

が、その前に、今、ぼくが本稿を書いている'01年末の時点でも、パソコンネットワークの中(?)で起っている、いうならば犯罪的事柄が——まあ新聞報道・テレビ報道だから当然なのだろうが——ほとんど連続して報告されている。現在運用されつつあるこのネットワークシステムであってみれば、報告されているような出来事は不可避である。善悪・是非に関係なく何んらかの目的をもってこのシステムを眺めた時(もちろん利用方法を熟知していなければならぬが)、その目的実現のために利用してみよう、という気持になるだろうことは、十分に予想される。実際現に起っているケースのほとんどがそうのはずである。この利用を抑制するのは、個人的な倫理感しかない。市場経済の下では、その機能化にあたって、この種の倫理感は軽視されるのが常識だから、したがって、犯罪的利用やいわゆる事件は連続する。その都度、ぼくらは、「この意外さ」に驚かされるわけだけれど、それは実はこのシステムの内部構造と総体的な機能が誰にもわかっていないからなのではあるまいか。わかっていれば、こんなことは起らない……?。

ともあれ、その程度にこのシステムは新しい。何が可能かも十分にわかっていないし、どこに限界があるのかも。早い話、誰でもいいのだがひとりのインターネットマニアがどうネットワークシステムを利用し愉しんでいるのかも、わかっていない。これから書くことは、そのわかっていないネットワークの周辺で起っている事柄の一端にすぎないのかもしれない。今後に期待して、とりあえず現象記述を試みておこう。

パソコンに向い、インターネットの最初の「一ページ」(というのかな)を開いた時のある種の興奮というか、快感というか、あるいは期待感というか、後からやってくる愉しみの予感というか、そういう感じは、少しでもインターネットを体験した人ならわかってもらえると思う。あの気分は、テレビやラジオ番組開始のコメント、映画の始まりを上げる直前のメッセージ等々が与えてくれる興奮とはちょっと異質なものがあるように思う。おそらく番組も映画も、内容はすでに完成している、実際にみるのはこれからにしても、とい

せいかもしれないのだが、ぼくの場合、インターネット中毒シンドローム（今や若い世代の五人に一人はそうではないか）と、かつての深夜ラジオ族とが、どうしても重なってしまっているからである。メディアに包まれようとしている、という点に着目すると、両者の間には決定的な相違などないのではあるまいか？

もちろん違いはある。まず個人のレベルで、みると、ネットワークに「参加」している個人の間の直接的なコミュニケーションは、たとえばラジオ深夜族の場合も、成り立っていない。コミュニケーションは、必ず、DJを介して実現される間接的なものであった。そしてこのコミュニケーションに期待できることも、たとえばお互いの悩みを語り合うといったふうには、限定されていた。したがって、全人格をこのネットワークに投ずるといった、インターネットマニアに時としてみられるメディア空間への埋没もしくは人格的没入などは考えられなかった。

社会的というか、全体構造的にみると、前者は、ラジオスタジオDJという中心的な核があって、それを軸にして集合態が形成されていた。少なくとも、構造的に中心はあった。しかし、後者の場合、参加のメンバーは同時に発受信が可能で、各種情報の所在が一点に集中している、などという構造性をもたない。リズム状の組織といわれる所以である。中心がないということは、辺境・辺際が存在しないことを意味している。大きくみると閉じた系なのであるはずなのだが、誰にもその全体を見渡すことなど不可能であるし、ぼくらの通常の想像力をもってしては、その全体像を描きえない。

直接にはこうした相違に着目して、前々著では、この電子銀河系もしくは電子メディア空間を、極めて特異な、人類の歴史に初めて出現したメディア空間であることを強調している。のみならず、ここで想像できる空間が、デカルト以来の近代科学が想定してきたいかなる空間とも異質であることも。少なくとも例の三つの次元によって想定される空間でないことはたしかであって、だからといって、いかなる次元をもってすると、この空間の全体をイメージできるのか、それも明確になっていない。要するに、近代という時代の支配的な観念、デカルト・ニュートンの空間観念がまったく通用しない、文字通り新しい空間の出現であることを再三にわたって指摘し、その正体を人類が知るのには、ずっと先の話ではないか、とまで書いてしまっている。この空間に関するべくのイメージは、前々著の時と今とほとんど変わっていない。早い話、いかなる次元をもってくるとこの空間の構造記述が可能なのかなども、依然としてぼくの想像

ぼくらの時代には、かくして、「グーテンベルクの銀河系」に加えて、この種の多様な「電子銀河系」までをも含むことになり、しかも機能の転換はあるものの、近代に出現した各種「銀河系」で消滅したものはない。写真は絵画を追放しなかったし、テレビは、あらゆる種の映画の誕生をも促している。だからして「グーテンベルク」は「終焉」しない。現に、インターネットでも、ケイタイでも、画面に表示された「文字」が読まれている。たしかに活版印刷技術が作り出した文字ではない。しかし、あそこに表示された文字の原型は、いわゆる各種各様の「活字」にある。つまり、何といふべきなのか、思わぬところで、先端メディアと、旧メディアが接し融合したとでもいふべきなのか。したがって、インターネット―ケイタイ系メディアは、部分的に旧「銀河系」と重なる部分をもっている、ということなのだ。

このことは、すでに、現代においては複数メディアが重層・錯綜するという命題を立てた時、内包されてはいたことである。しかし、重層・錯綜は、複数メディアが併列的に並んでいるだけではなく、こういう形でのメディア間の相互浸透もあるのだ。しかし、この話も、決して新しくはない。メディアの相互浸透といえば、すでに新聞・雑誌の時代（大正期から昭和の前半期にかけて）に、メディアの交錯は現実にあった。早い話、映画その他の広告のすべてが、新聞・雑誌に掲載され、ラジオは、新聞や雑誌について語っていたし、その逆もあった。どうやら、社会的に有効性をもつようになると、既存メディアとの相互浸透が起こるようである。今日、大スペイタル映画は、上映後のビデオ販売を予想して制作されている。つまり、テレビ画面への表示を十分に意識している。この映画は、映画館というメディア空間と、リビング・茶の間・個室というメディア空間用に作られているのだ。空間の重層・錯綜・融合は、今や常識なのだ。かくしく、新旧各種の「銀河系」が相互浸透し、一大「銀河集団」を構成している、というのが現代の構図ではなからうか。

四 電子メディア銀河系の現状

再三にわたって深夜ラジオにふれ、電子「銀河系」に言及し、最後に現在の全「銀河」構造にまで話をすすめたのには、理由があった。前項でふれた新しい「電子銀河系」について多少の序説的考察を試みたかったからである。何よりもまず、この新しいメディアが、全く新しい性格をもって、突如として出現し、急激に普及したわけでは必ずしもない、という点を強調したかったからである。トシの

こうした小「銀河系」の集団、メディア間の自由な移動、複数のメディア空間の同時所属といった事実を社会的にみると、「グーテンベルクの銀河系」もそう単純な構造をもっているわけではなく、社会的にみると重層・錯雑した構成体を成しているともみなさざるをえない。折り重なっている「銀河系」である。のみならず、人々は、「グーテンベルク」「非グーテンベルク」のそれぞれに特別のこだわりなどをもっていないから、現実には、「グーテンベルク」のそれと、「電子銀河系」とも重層・錯雑・交差し、時には融合に近い状態になっている。これが現代のメディア空間なのである。

最後にふれておきたいのは、ケイタイのこと。ケイタイは、電話というメディアのもつ定点性、実利性・道具性等を決定的に変えてしまった。ケイタイの所有と利用は、圧倒的に若い世代に偏っている。もちろん、上の世代の利用もあるが、この場合は明らかに機能上電話の延長線上にあり、ビジネスにかかわることがその通話内容のすべてである。だから道具である。これに対して、若い世代のそれは、日常のとりとめのない会話の繰り返しか、向き合っては話しにくい、だから場合によっては、より近い内容を、通話というよりも、ケイタイというガジェットに、つまりはメディアに語りかけている、むしろつぶやいている。車内でケイタイをひたすら眺めている若者をよくみかける。誰かからの着信を確認する場合もあって、これは確認が終ればケイタイは収納される。しかし、これ以外に何も語らない、何も表示しないケイタイをひたすらみつめている図は、考えようによっては、相当に奇妙である。着信を待っているのだろうか、それともただケイタイというガジェットをもて遊んでいるだけなのか。ぼくは、その様態をみて後者だと思っている。それは、情報の発受信を可能にしてくれるガジェット＝メディアと彼（女）との、ある種のコミュニケーションなのであるまいか。つまり、彼（女）はケイタイをメディアに、自分一個のメディア空間を構成していて、ついていないテレビ同様、そのケイタイは、何らかのメッセージを発信し、彼（女）はそれを受信している。

もちろん、若い世代でもケイタイを「利用」しているものも少なからずいる。彼（女）らは積極的にインターネットと結合させ、各種情報の収集を行っている（かにみえる）。しかし、これとてインターネット―ケイタイ系というメディアを愉しんでいる可能性を否定できない。とにかく、ケイタイの急激な普及、新しい機種との頻繁な交換は、若い世代のCD購入を減少させてしまった、といわれるぐらいなのだ。したがってこのメディア空間の普及と成長がいかに急速であったか。

さらに、新聞が、なんらかの意思があつて記事にする特定政治イシュー、世論の動向に関する評価、特定政治政党に関する情報等々は、政党間の力関係、相互作用になんらかの意味をもつと推定される。

あるいは、国際間の対立する問題に関して、おそらく、交渉の当事者は、「この国の新聞の社説にはこう書いてある。これは世論を代表していると思われる。したがつてお国の主張をそのまま受け容れるわけにはいかない」程度のプリミティブな発言をすることだろう。その際に、社説の閲読率が1%代であることは関係ない。つまりは、「新聞が書く」とはこういうことなのだ。したがつて、新聞というメディアをめぐる社会的空間は、今や極めて特殊な構造をもつていて（何しろ読者は少ない）、特殊な社会的関係の中で「力」を維持している。つまり、これはかつての典型的な「グーテンベルク銀河系」の現在形なのである。もちろんぼくは、この社会関係・社会力は、しばらくは続くものと考えている。したがつて「銀河系」は終らない。

雑誌・書物の単独の発行部数は激減しているけれど、総発行部数に変化は少ない。街頭の本屋の店先、郊外の大規模書店を想像してみてもよい。プリンテッド・メディアは、全体としては規模は拡大中なのかもしれない。したがつて、その全体を「銀河系」とみなせば「終焉」どころではない。健在であり拡大中なのである。しかし、マンガを除き同一雑誌・書物の発行部数の減少からして、個別のメディアの空間は縮小している。だとすると個別の小「銀河系」が数多く集つて、大「銀河系」を構成しているという表現が適切なのかも知れない。

そしてさらに重要なことは、ある時ある車内で雑誌を読んでいた彼（女）が、次のある状況では文庫本を読んでいる可能性を否定できないし、その人物は、週日の夕食後に人気ドラマの視聴者であるかもしれないのだ。その他、彼（女）はCDをいくらか集めているし、ビデオも何本かもつていて、カメラを趣味としているかもしれないのだ。⁽⁴⁾とすると、彼（女）は、複数のメディア空間の間を、常時移動しているのだ。それは必要や状況によってそうなるのだろうか、ぼくがひそかに推測するに、彼（女）にしてみると、そのメディア間の移動が快感である可能性がある。「メディアを切り換える」とは、一種の変身、今時流行りの変身衝動の現われの可能性がある。メディア空間の移動のことを書いたけれど、ついでに指摘しておかねばならないのは、複数メディアの同時接触のことである。この点に関しては前々著の「メディア人間」の項で説明しているので、ここではこれ以上はふれない。

の「銀河系」が、急激に「電子銀河系」に変化する、移行してしまう、ということとは、近未来に属する話なのではない、と思われる。「グーテンベルクの銀河系」は、それはたしかにさまざまな経焉要因をかかえはいるだろうけれど「経焉」は近い将来にない。それは、ぼくらのライフスタイルに、そう急激な変化が来ないためでもあるし、ぼくらの中に残るさまざまなメディアへの志向があり、その志向に対する習慣性が残存するのであるからである。

こうして「グーテンベルクの銀河系」は終わらない。市場経済と民主主義が続くかぎりには、もちろん、この「銀河系」の社会力は、相対的には低下している。特に、強力だったメディアである新聞の低下は著しい。しかし、人々の接触頻度の低下の割には、新聞の社会力は比較的大きい。ひとつには、他メディアに比べると情報の密度が高いからである。ある人にとっては、特定の企業の株価に絶大な関心があるだろうし（一行の小さな数字で表現されているだけだ）、ある人には些末な三行広告が死活の意味をもっているし、家庭欄のハウツー記事を重視している人も少なからずいるだろう。いずれも、他のメディアでは、特別な方法に頼らないかぎり入手不可能な情報である。のみならず、たとえば市場の動向を報ずる、解説記事、専門家のコメントは、市場経済の動きに一定のインパクトを与えずである。その記事の読者数に直接関係のない事情がそこにある。したがって一定の社会力に影響力を認めざるをえない。

だけではない。新聞の第一面・政治面にはその時々の世界―国内の政治状況に関する記事が掲載される。それには、事実を直接的に報ずるものもあるけれど、いわゆる「事情通」や特殊なルートや記者と政治家の個人的関係などから出てきた特異な情報もある。それは内幕情報であったり、観測情報であったり、個人的な判断にもとづく評価情報であったり、時には、まったくガセネタであったりもする。このほかに、新聞社もしくは記者が特殊な取材活動の結果得られた情報（個人的な取材網を使った記事であるだろう）や、特に新聞社が独自に行った各種調査、とりわけ世論調査がある。世論調査の内容は、各社・各局が同じような方法で、同じような時期に行うので、内容に共通する点が多い――だから信用できる、ということには必ずしもならないのだが。たとえば選挙前の調査でえられた「投票率」と現実の投票率の著しい較差など、信用度にかかわるのではあるまいか。しかし、選挙前の各党の勢力分布に関する調査データが、候補者やその所属政党、実際に投票所に行く人々の投票行動に与える影響は否定できない。やはり「力」はもっているのだ。

される。たとえば、いわゆる総合紙を読む人々が、ぼくのいうソーラー族（ミーハー族に対して）を多く含んでいるのは事実であろう。おそらくは、勤務上不可欠のある問題についての情報・知識・批評・評価を手に入れようとしているからである。文庫本や特殊な雑誌（趣味、最近ではPC関係の雑誌をよくみかける。このテの雑誌はどこまで大衆化しているのだろうか）の読者も、多分にソーラー族的ではある。マンガも電車の中となると、雑誌とほぼ同数のコミック本がみられる。その読者たちである彼らは、いわゆる一般的なマンガ好きとは違う。少なくとも、一度や二度は「コミケ」に行ったことのある人々ではなからうか。してみれば彼らもソーラー族である。ただこうしてみると、ソーラー族の人口比も相当に高い。もしかすると、大衆マスはもう存在しないのかもしれない、マス現象は、いくつかのソーラー族の行動形態の集合にすぎない——というぼくの年来の仮説が当たっているのかもしれない、と若干は自信をもちたくなる。

ただ、通勤・通学時のスポーツ紙、夕刊紙、美容院でみるとなくみている雑誌の読者となると、すでに指摘した同一時刻に同一番組をみる集合態に性格的にはかなり近いのではなからうか。というのは、彼らの新聞・雑誌に対する基本的な態度は「読み捨て」である。あるテレビ番組を観終って「あぁ、面白かった」というのと一緒である。従って、文字通り、エンタテイメントとしてのメディア接触である。これまで、愉しみとしてのメディア接触を肯定的に評価してきているので、この彼らのメディアに対する態度を非難する気はない。

むしろ問題は、この「銀河系」にも、新しい「電子銀河系」と同様の享受者集合態が存在する、ということなのだ。

近代教育の成果なのだと思うのだが、ぼくらの中には、「読む」という行為に対する習慣というべきか、あるいは執着というべきか、とにかくある状況に出会うと常に同一行動をとる。この場合だと、たとえば電車に乗ると雑誌書籍を広げる、新聞を読む、朝食時に新聞に眼を通す等々である。中に、マンガ・アニメなどのマニアも含まれる。ソーラー族の実体である。しかし、果して何らかのメディアに対してソーラー族的習慣をもっていない人が実在するのだろうか、が実はぼくの疑問なのである。それはともかく、状況によつては、典型的ともいえるビデオ族が、雑誌・文庫本その他を眼にすることだってあるのだから、ぼくは、少なくとも近代教育を経過してきた人々の大半に、読む習慣があり、その習慣が持続していて、そして状況によって行為が成立するとみている。であれば、こ

命題をより普遍化したのが、マクルーハンの「地球村」であったと考えられる。

三 グーテンベルクの銀河系の存続

ここで考えられるのは、出版部数数百万部の新聞、数十万部（数百万部ということもあったようだ）の雑誌の読者集団のことだ。基本的に孤立していて相互作用が皆無に近いという点で、前項で指摘した電子メディア共同体（空間）と同一である。しかし、この「グーテンベルクの銀河系」と称せられる世界は近代化の過程の中で独特の役割を果してきていて、読者をひとつの集合態とみなす考え方は、この文脈に関するかぎりとられていない。むしろ、「グーテンベルク銀河系の終焉」⁽³⁾なる議論があるぐらいだ。実際、今後出現する可能性の高いメディア状況＝コミュニケーション形態を予測する場合、この著者の指摘は、大方当たっている、とぼくは評価している。その状況・形態が歓迎できるものであるかどうかは別問題なのだけけれど。

ただ一点、ぼくが疑問に思うのは、「グーテンベルク銀河系の終焉」という断定的評価である。大枠の話からすると、本シリーズで再三指摘しているように、「近代」は終わっていない、「ポスト・モダン」に完全に移行しきったわけではない。むしろ、ぼくらの社会生活のある局面では、「前近代」をも残存させている。したがって、「近代」の形成と維持に少なからざる貢献をしたとされる「グーテンベルクの銀河系」の役割は終わっていない。朝刊とそこに挿入された大量の折り込み広告だけをみても、この「銀河系」の存在を疑うわけにはいかない。「銀河系」は、市場経済とも、政治の世界での宣伝広告広報PRとも密接にかかわっている（ということになっている）。

それだけではない。朝夕刊に眼を通す習慣をもっている人の数、通勤・通学時の新聞・雑誌・マンガ・文庫本・書籍の数々になると、その人数は膨大である。同じ時刻、方角こそ違え、通勤・通学の人々が、同じ新聞を、雑誌を、マンガを、文庫本等を読んでいる、（あるいは）眼にしている。これは、少なくともよく似た状況の下で同一メディアに接している、という構図になっている。ぼくは、これらの人々には決定的な共通点がいくつあるとみている。したがって、再三いうように定義の仕方にもよるのだろうけれど、ひとつの集団、少なくとも共有性を多々もった集合態と考えている。もちろん、この集合態には、その構成メンバーという点で偏りが推定

他民族にとって、巨大民族の存在は、しばしば脅威である。両者が接触してどんな事態が出来たかについては、夥しい歴史的事例がある。それと同じだとはいわない。しかし、同一時間に、あるいは同一の意識形態を伴って、同一の番組を、国民の90%以上が、そして多くの他民族がみている、という事態は、想像してみればよくわかると思うが、「怖るべき」状態ではなからうか。『紅白』だからいいようなものの、これが、強烈なイデオロギーを背景とした特殊なメッセージ番組だったらどういうことになるか。この実例を、数こそ少ないが、ぼくらはいくつか知っている。もちろん『紅白』だからいいんであって、一億人以上の視聴者は、だから成立する。メッセージ番組だとすると、余程の特殊状況なしには無理だろう。この点で、ぼくらは楽観的になっていて大丈夫である。

集合態の大きさにもよるだろうけれど、この『紅白』と同一の範疇に属するものをぼくらは数多く知っている。さしずめ、NHK『朝のラジオ小説』などはその典型で、かつては50%を超える視聴率を実現し、「名作」とされたビデオは、時間帯をずらしたり、各地、各国で放映されている。その規模は、決して『紅白』に劣るものではないだろう。おそらくは一億を大幅に超える視聴者集団が、結果として、構成されたはずである。「同一番組を一億を超える人々が……」という事態は、少なくともぼくには「怖るべき」状態である。その他、かつてはよくみられた「お化け番組」（視聴率が異常に高い）がある。少なくとも同一時間帯に視聴者（＝国民）の半数以上が、同一の番組をみていたのだ。

これらとは若干異なったケースになると思うが、この数年、選挙時の全局の総合視聴率は90%を超える。番組こそ違っていても、内容は似たようなものである。競馬のゴール寸前の状況によく似たシーンが展開され、これもまたよく似た解説が付されている。90%以上の人々が、これほどまでに政治に関心をもっていたのか、とぼくは深い感慨にとらわれる。何しろ、投票率は50%前後なのだから。それにしてもこの瞬間、『紅白』によく似た事態が出現している。やはり、電子メディアが「構成」した共同性・集合態という説明が最も妥当していると思う。

となると、ぼくらは、さまざまな「国家（民）的大イベント」の際に、こうした集合態の出現をしばしば目撃している。特に'60年代から'70年代にかけて、こうしたイベントが数多く出現し、その都度、50%を超える視聴率が実現されている。こういう実例を数多くあげてくると、前にも指摘したマスメディアによる集合性・集合態の成立という命題は成立しているとみなしてよからう。そして、この

団とみなせるのだ。しかし、その集団はどこに、どういう形態で、となると、なんとも説明のしようがなかった。集団をメディア空間、電子共同体と言い換えてみる。たしかにイメージはいくらか鮮明になる。そういう集合態（集合性）があることは了解できる。しかし、どこに、どういう形で、という問には依然として答えられない。どうしてなのだろうか。

もともと、「国家」「民族」などにも、共同性、集合性、集団性を、ぼくらは認めている。たしかに、国家は「国土」という物理的領域に一応は対応している。しかし民族となると、地理的に分散している場合が多いし、その物理的境界線なども極めて確定しがたい。それに、現代では同一地域内に異民族が共同生活を営むのは、常識に属する。となると、少なくとも民族は、かの電子メディアが「構成」した集団性によく似た性格をもっていると考えられる。いや、本来、民族なる、あらためて再考すると決めて漠たる集合性が先にあって、これとよく似た、電子メディア空間・電子共同体が、新しいメディアの出現・導入・利用によって「構成」されたというのが、ものの順序であろう。民族の場合、その集団性の契機になっているのは、「同一民族である」という意識であろう。つまり、民族的同一性なる多分にヴァーチャルな契機、いやメディアによってである。これに対して、電子共同体の方には、当初、ラジオという確実に存在するメディアがあった。そのメディアを契機に集団性が「構成」されたのであるが、さて一たび構成されてみると、その実体も辺際も、場合によっては集団性の核なるものも茫漠としてくる。要するに茫漠のだけけれど、しかし、その実在性を疑うことはできない。とにかく確実に存在しているのだ。もちろん、ヴァーチャルであることは、決して非在を意味しているわけではないのだ。

深夜ラジオをめぐる新しい集団性・集合性をひとつのモデルとすると、これに酷似した集団を、ぼくらはいくつか指摘することができる。たとえば、一昔前の巨大集団性としてあげられるのは、大晦日NHK『紅白歌合戦』を聴取していた人々の「集まり」。一時は90%近い視聴率を実現していたから、海外を含めて日本人、『紅白』に特異な関心をもつ東南アジア系の人々、その総数はおそらく一億人を超えていたと推定される。その人々が、同一時間に同一番組をみるという共通の行動をし、演奏者やその演奏に、非常によく似たまさに共通の感慨をいだいていたことであろう。これは、マクルーハンのイメージした「地球村」によく似た性格、いや「地球村」そのものではなかったか。それに、『紅白』のビデオは東南アジアを中心によく売れたとも聞いている。とすると、集団性は、必ずしも同一時刻に限定されたものではなかったと思われる。まさに、「地球村」の「地球村」たる所以ではなからうか。

れよりもずっと多い。もっとも、『もうひとつの広場』の読者は、聴取者よりは少なかったであろうが、実際の投書者数を、ヒト柄もフタ柄も上まわっていたはず。かくして『もうひとつの広場』もまた、番組のつくるメディア空間から派生したもうひとつのメディア空間であった。もちろんこれは、実際の番組の聴取者のつくるメディア空間に比べれば、ひとまわりもふたまわりも小さかったであろうが。

ついでにつけ加えると、放送局のスタジオや、小劇場を使った、DJを囲む「ファンの集い」的集会もまたあった。ここに集まった数百名は、規模でいえば投書者のそれに近い集団であった。投書者がここで仮設のペンネームをぬぐこともあったらしいが、終始ペンネームで通してしまうこともあった。実在の実際の人物が登場してきているにもかかわらず一定のヴァーチャリティが維持されていた、ということだろうか。がいずれにしても、これが、さらにもうひとつ派生したメディア空間であったことは否定できない。つまり、ラジオ深夜番組は、こうした派生的集団を抱え込みながら、やはりひとつの注目すべきメディア空間であった。

しかし、このメディア空間にぼくがこだわるのは、実は、次の点においてなのだ。深夜ラジオ番組が、ひとつのメディア空間を形成していたとして、実際、それはどこにあったのだろうか。投書集の『もうひとつの広場』が読者たちと彼らが所有する当該書籍によって、ぼくらは、ある程度具体的な空間イメージをもつことができる。「ファンの集い」も同様で、そこがひとつの空間を構成しているとみなすことは容易だ。これに対して番組放送時に形成されているメディア空間とはいかなるものであったのか。

たしかに、放送局のスタジオがあり、DJがいて投書を読み、みずからの感想を語り、これも番組の目玉のひとつであった音楽作品を解説していた。しかし、この状況は、たしかにメディア空間にちがいないがこの空間のほんの一部でしかない。他方に、番組を聴いている、特に若い世代の個室があった。これ自体たしかにひとつのメディア空間ではあった。しかしこれもまた、この空間を構成する末端のユニット単位でしかなかった。この空間は、この両極にあるメディア空間を含んで、規模でいえば、全国的とでも表現するしかない大きさであったが、ではどこにどういう形で実在していたか、となると、相当に想像力の豊かな人物であっても、この空間の全体をイメージすることは、相当に困難か、実際には不可能なのではあるまいか。電子共同体とはいつてはみるものの、その実体（実態？）となると、この程度に茫漠としてきてしまう。前稿では、この空間を集団たらしめるいくつかの要因を指摘しておいた。これは、定義上、集

ア空間はこの意味でもヴァーチャルであった。

しかし、ヴァーチャルであったことは、番組の存在理由を否定するものではない。先にも書いたとおり、内容はありうる悩みであり、寄稿者・投書者以外に、そのやりとりを聴いて実際に共感し、行動のなんらかの指針として受けとった聴取者が少なからずいたことが、これまた十分に予想できるからである。「オレと同じ悩みをもつヤツがいるんだー」「なるほど、そういう理解の仕方があるんだ」等々。それ故にこそ、ある期間、番組は一定の聴取率を実現し、活性状態にあったのだから。

さらにこれに付け加えると、投書者のほとんどが実名でなく、その番組のみで使用したであろうペンネームを採用していたこと。たとえば、〇〇県（〇〇市でもいい）の××というように、××のところには動物やその他の略称などが好んで用いられていた。そしてDJが投書を読むたびに、「これは、例の〇〇県の××からのもの。毎度のことだけれど面白いから紹介しよう」と説明を入れていた。××は仮想され作られた「人格」であったのだ。当の本人は、自分の分身と思っていたかもしれない。いや本当に創造された「人物」として、ちょうど文学作品の登場人物のように、創作され想像上の人格として、ある行動——特定の内容の投書を書くこと——を演技させられていた可能性だってある。つまり、投書者はヴァーチャルな存在であった、ということなのだ。実際、投書者、寄稿者たちは、「〇〇県の××さんへ」といったふうには、お互いにペンネームで呼びあっていた。本名でない、お互いに仮設された人物であることを承知の上であった。ヴァーチャルであることを、了解した上で、やりとりを愉しんでいた、といっている。つまり、もう一回いいおすと、仮設された舞台上で、お互い仮設された台詞をやりあっていることを承知の上で、投書が読まれていること、つまり〇〇県の××と××県の〇〇と対話がエンジョイされていた。そして、当然のことながら、番組の聴取者は、寄稿者、投書者に比べれば圧倒的に多数のはずだから（ラジオはマスコミなのだ。番組が成立していたことが何よりの証拠である）、彼は「また例のふたり、やっってる、やっってる」といって、これまた番組（の中でのやりとり）を愉しんでいた。あるいは、そこから、何らか「役に立つこと」を見出していた。『もうひとつの広場』に集録されている投書は、これまた選ばれた文章であるから、それなりに、よくまとまり、読者の興味を誘うだけの魅力をもったものが大半であった。しかし、著名はペンネームであり、何よりもまず、その内容は疑えば疑えた。これを見ると、番組で読まれた投書の、さらに数十倍の投書があったと推定されるが、さらに加えて——実際に番組を聴取していたものは、そ

二 メディアのつくる集合態

情報共同体といい、電子共同体といい、電子メディア空間という。そういうならば、実はすでに書いたことだけれど、その名にふさわしい集合態がすでにあった。「はじめに」にでも指摘しておいたように。

60年代後半、深夜ラジオの特定番組のファン・常連になり、投稿をし読まれた投稿への反応にまた投稿し、という連鎖が構成した共同体。この共同体に、ただ番組を聴いているだけという周縁部のメンバーをも含めていだろうと思う。となるとその成員の規模は、百万の単位で数えるほどであったと推定される。こういう共同体が、数十本あった深夜番組ごとに存在していた。これらは、投稿の連鎖、DJの語りかけ以外に『もうひとつの広場』と名付けられた全投稿を収容した書籍をもっていた。その意味では、純粋に「電子共同体」であったとはいえないが、そもそもラジオ番組を前提にして成立したのであって、十分に「電子的」であったといべきである。そして、投稿集をもつことによって、十分にメディア空間であった。これがひとつのメディア空間である理由は、ほかにもある。

まず、読まれた投書があったとしよう。それが、青少年期に固有のある種の「悩み」を告白した内容をもっていたとする。翌週にはその内容に対する他の聴取者からの「回答」や共感や感想が大量に投稿され、そのうちのいくつかがDJによって紹介され、そして次の週には、さらに「回答」、共感・感想に対する感想が寄せられ読まれ、DJが「この問題は、とりあえずこの辺で一たんピリオドを打とう」と提案するまで、この連鎖は続いていた。ここで問題にしたいのはその中味である。「悩み」は本当に実在したのかどうか、本当のことは投書した本人しか知らない。「悩み」を想定してみて、どういう回答・共感・感想を寄せると話しが愉しくなるのかと想像し、あるいはそれらの連鎖を愉しむためにのみやってみた可能性が十分にあった、とぼくは推測している。現に、そのために番組は確実に面白くなり、活気を帯びたのである。その際ことごらの実在の有無は不可欠であったとはいえない。話は最初から作りごと「ヴァーチャルであったのかもしれないのだ。しかし、その「悩み」は、あるべき悩みであり、したがって多くの真摯な共感があり感想があったのだから。しかし、その感想もヴァーチャルであった可能性は否定できない。現にぼくは、その種の番組の担当者から、明らかに投書マニアが存在すること、投書内容は疑えばいくらでも疑える、という主旨の内輪話を聞いている。要するに、この番組によるメディア

ディアをたずさえている。意味と人との関係は、ひとつの閉じた世界を形成するし、メディアと人とのかわりは、人間的事象を構成するひとつの重要な要因である。この「閉じた世界」というイメージと、要因となっている人とメディアのつくるかかわりから、メディア空間という構成的概念が導出されてきた。メディア空間という概念を措走し、この概念に対応する空間を構成し、その内部構造を描くことによって、人間的コミュニケーションの実体の主要部分が観察可能になるのではないか、という見込みがあつて、メディア空間論となったのだ。従来のコミュニケーション論が十分に明らかにしようとしなかったメディアと人間の関係が明らかになった、とも思われる。人間は人だけでなくメディアとも確実にコミュニケーションしている。これをいうところの「コミュニケーション」から除外することは、実態上も理論上もできないと考えられる。ぼくがメディア空間にこだわり続けている所以である。以上が、メディア空間論をここまですすめてきた上でのおおまかな結論である。文化というカテゴリーに属する空間まで描いてきて、残るのは現代の先端的情報技術が生んだ「情報共同体」とでもいふべき不可視の空間である。西垣通氏によれば「電子共同体」である。パソコンにしる、大量記録装置にしる、高速大量の情報伝達装置にしる、いずれもメディアである。したがって、情報共同体・電子共同体とは、もう一度いいなおせば、電子(情報)メディア空間である。インターネットでもいい、World Wide Webでもいい、チャットの世界でもいい、知識・情報の探索(検索)のさいの各種データベースへのアクセスの際の一種の時空的拡がりでもいい、いずれもが広義の空間を構成している。もちろん、従来からぼくらがイメージしてきた空間、デカルトⅡニュートンの空間からするとこれは空間とはいえないかもしれない。しかし、この世界にアクセスしている人は、誰しも、ある拡がり、とでもいふべきものを実感しているはずである。つまり、従前の意味ではないにしても、なんらかの「空間」を想定している。だからこそ「電子共同体」といった命名が出てくるわけだろう。ここで、これらの拡がり、もしくは共同体をあらためて「空間」と呼ぶことにする。介在しているのはすべてメディアであるわけだから、これはメディア空間である。ぼくの直観によるイメージだと、こういう空間がまさにネットワーク状をなして存在していて、しかもその集合態がさらにもうひとつの、それこそ辺際の不可視である空間を構成している。World Wide Webというのは、明かにひとつの空間でもあるわけだ。本稿では、少なくともその特質の一端にでもふれてみたいと考えている。

換されることばたち、いわゆる広い意味の記者会見の際のことばたち、選挙に際して候補者の発することばの数々、あるいは政治の動きに関するマスコミのことばの大半、これらはいずれも、底意、下心、期待、予測あるいは「深い意味」等々があった上でのことばたちであって、したがってまさに十分にヴァーチャルである。いずれも仮設されたイメージがあつて、それにそつて発話されている。その仮設もイメージも広い意味の「幻想」に属しているからヴァーチャルなのである。つまりは「仮想された世界」のことばたちなのだ。ぼくらはそのヴァーチャリティを当然のこととして受け容れている（「公約は破られるためにある」等々）。つまり、メディア空間はいずれにしろ多分にヴァーチャリティを含んでいる。これは、喜怒哀楽を共有しようと願ひ、狩を成功させようと願つたが故に使用せざるを得なかつた（アーティキュレートされた）分節言語のせいなのだ。ひとたび使用可能な分節言語が出現すると、その言語が人々自身の心性や人々にとつての環境世界についてのイメージ形成の前提になる。ことばが意識のありようを決定し、言語が環境イメージを規定する、そういうことが十分に起こりうるのであるし、現にそうなのだ。いや、現実には人々の思考は、そういう過程をへて経過し続けてきたものと思われる、そう、実際ぼくらの思考はそういう構造的性質をもっている。あらかじめ指定されたイメージによって現実の環境世界を認識し、自己イメージを構成する。これはヴァーチャリティそのものではあるまいか。狩の世界から政治の世界まで、日常生活メディア空間を含めて、多かれ少なかれ、こうしたヴァーチャリティを含んでいる、ということなのだ。ぼくらが只今現在、問題にしているヴァーチャリティは、たしかに新しい情報技術の開発によるところが大きいわけだけれど、現に「ない」ものについての意識という点からするならば、要するにメディア空間はそもそもがヴァーチャルであつて、そのヴァーチャリティに新しい要因がもうひとつ、もちろんかなり決定的ではあるのだが、加わつたということなのだ。このヴァーチャリティというか、幻想性というか、そういうものを担ふことばが、人と客観的事物の間に介在した時、フェティシズムというぼくらの想像力を刺戟してやまない「幻影の世界」が成立する。幻影とはいつても、この世界は人にとって十分にリアルなのであるが。

第二。ことばをもつてしまつた人間は、日常・非日常の全行動において、常にことばをまもつてゐる。「意識の実体は内面化された言語である」といわれるように⁽¹⁾。ことばともある、ということとは第一に常に「意味」が意味をもつて存在していて、そして第二にことばを外在化したもの、という形で実在するということだ。つまり、人は常に意味とかかわりを持ち、しばしば外在化されたことばⅡメ

たつて言及してきた「ラジオコミュニティ」について、再度取り上げることになる。もちろん同じことを繰り返すのではなく、インターネットを視野に入れての試論になる。

ここまでにいくつかのメディア空間を描いてきた。それらには、日常、非日常、歴史的普遍、歴史的特殊、時代の前後、文明・文化の進化の違いを越えた共通の特性——たとえばメディアと人間の一体化等々——とともに、時代の違いによる異質の特性——たとえば狩の空間のメディア性と現代の政治の世界のメディア性——があった。とはいえ、それがメディアと人間の心性の融合という傾向をもっていたことだけは、あらためて指摘しておきたい（ここから「人格とメディアのつくるユニット」という発想が出てくる。この発想はこの稿の続編でキイタームになるだろう）。さらにこのユニットの現代における存在形態にも思いをいたさざるをえない。つまるところ、ユニットのつくる構造とその運動形態の解明こそが、このシリーズの最終的なゴールなのだから。ではまず「電子メディア銀河系」の初期の形態の説明から始めよう。

その前に先史時代のメディア空間（先に推定を駆使して描いてみたもの）から、現代に固有のメディア空間に共通の特性にもう少しくわしくふれておこう。

第一。人類が類として成立した最初期の、たとえば日常的なメディア空間、男たちは狩に行っていて、女と子どもが営む日常生活の中のメディア空間を想定してみよう。そこには、愛と憎、悲と喜、有と無、そして生と死といった生活世界に対応する物理的実体を伴わない（あるいは指示対象をもたない）意識・イメージが確実に存在していて、人々がその意識の状態をなんらかの方法でコミュニケーション||共有していたことは、まずまちがいない。ある時・ある場面でそのメディア空間はこうした意識||記号（とっていいだろう）によって満たされる。これら意識||記号は指示対象をもたないという意味で、「幻想」の世界に属していた可能性がある。たとえば「男たちの狩の成果がないかもしれない」といったような。そういう意味では、このメディア空間はヴァーチャルであった。こうしたヴァーチャリティは、この時期のメディア空間の大半に共通していたと考えられる。狩を前にした男たちのシミュレーション（これも正確にメディア空間を形成していた）の場面も十分にヴァーチャルであったはずだ。

途中にさまざまメディア空間があるわけだけれど、それらを全部とばして現代の政治的世界のメディア空間。国会の審議の場面に交

ザ・ミーディアム

——メディア論の試み(VIII)——

第五章 メディア空間(4)

中野 収

第五章 メディア空間(4)——電子メディア空間論序説

一 はじめに

サブタイトルにあるように、ここでは電子メディアによる空間を扱う。「電子メディアの銀河系」ということばがすでに使用されはじめている以上、この空間は実在すると考えるのが妥当だろう。しかし、本稿の後半でみるように、この空間はまだ、社会的に安定して恒常的な機能を果し、社会・文化・生活の中に有機的に組み込まれ終ったとはいえない。要するに、この空間は進化・進歩・変化・変容の途中にあるとせざるをえない。サブタイトルに「序説」とことわった所以である。ぼくらは、この空間を完全に描き出す段階にはいないということである。本格的には、次に書く予定の稿で扱うつもりである。

ところで、「電子メディア銀河系」という概念からして当然なのだが、コンピュータのつくるネットワークが主として想定されているけれど、電子メディアにも先例があって、その主たるものはラジオとテレビである。実際本稿の前半で扱われるように、ラジオは、確実に新しいコミュニティを形成していた。テレビのつくるネットワークも、決して「グーテンベルクの銀河系」に等しいわけではなく、やはり「電子メディアの銀河系」を形成していたと思われる。したがって、本稿では、ぼくが今までに書いたエッセイで再三にわ